

もう六十年も前の話。私の父は川柳に凝っていて、地域や職場で同好会を作り、松山の川柳大会にも出かけていた。時折、小さなトロフィーなども貰って帰ってきた。しばしば職場の仲間を家に招き、母の手料理で即席の川柳会も開いていた。当時、中学生の私には、川柳などに関心はなかったが、大人の会話は少し気になっていた。

ある夜の川柳会でのこと、テーマが「女心」だということが、狭い家なので丸聞こえだった。その頃、バーブ佐竹という歌手の「女心の唄」が流行っていた。バーブ佐竹は長く流しをしていた苦労人で、お世辞にもハンサムとは言えないが、哀愁のある低音が魅力だった。因みに、その頃は低音の渋い男性歌手も人気があった。

ともあれその夜、母に頼まれ追加の酒を父のところに持って行った。その時、酔った客から「てっちゃん（私の愛称）も女心で一つ作れよ」と言われた。すかさず「こいつに女心はまだわからんよ」と父。爆笑の中、思春期の私は逃げるように部屋を出た。

どうもそれがトラウマとなったらしく、川柳は作れない。その延長線の（と言うと失礼だが）俳句からも遠ざかることになった。

誘われて渋々俳句を作ったのは、五十代。真面目に取り組むようになったのは六十五を過ぎて。だがその経緯を語るには紙面が足りない。今はあれほど嫌いだった父の川柳の雅号を借りて、滑稽俳句を詠んでいる。女心は未だもってわからない。